

要旨

本研究はコミュニケーション能力の養成を目的とする日本語教育の基礎的研究として、参加者の異なる三種の対話資料各二例の反復表現の機能を情報量の変化という観点から分類し、その出現傾向を分析したものである。その結果、三種の資料間には反復表現の機能別出現傾向に有意差が認められた。

談話における反復表現は大きく分けて、反復表現がきっかけとなって情報量を増やし話の流れを先へと進める「進展機能」と、情報量を増やすきっかけとはならないがコミュニケーションの流れを支える「補強機能」の二つがあると考えられる。「姉妹の雑談」「友人同士の雑談」TV番組『徹子の部屋』の三資料において、「友人同士の雑談」は他の二種に比べ「進展機能」の比率がやや低く「補強機能」がやや高いが、これは「友人同士の雑談」の「コミュニケーションの共同性」の高さを示すものであると解釈される。

【キーワード】反復表現 進展機能 補強機能 コミュニケーションの共同性 情報量の変化

1. はじめに

畠(1982)は、「実際の会話を観察してみると、ある内容を相手に伝えようとするとき、その内容をただ正確な表現で(一方的に)伝えるものではない。会話(対話)は一方的に成立するものではなく、相手との共同作業によって成立するものである」と述べ、語学教育において「コミュニケーション能力」と言う際に、この共同作業の必要性を念頭に置かなければならない点を指摘している。

それでは、コミュニケーションを参加者相互の営みであると捉えた場合、各参加者はどのような共同作業をおこない、またそれはどのような言語上の特性を示すのだろうか。参加者相互の共同作業の過程をあらゆる言語現象としてよく指摘されるのは「相づち表現」であるが、「反復表現」(くり返し)の重要性についても着目されるようになってきた。そしてコミュニケーションにおける反復表現の役割は極めて重要であり無視できないものであるとして、コミュニケーション上の役割を担うさまざまな談話機能が報告されている

(Tannen1989, 中田 1992)。

しかし反復表現の機能と一口にいってもそれらが全ての談話に同一のパターンで現れるわけではなく、談話の状況によってそのあらわれ方は異なることが予想される。そこで本稿では、人間関係、談話の種類など変数の異なる日常談話の資料をもとに、各談話における反復表現の機能を分類した上で、状況の異なる談話においてそれぞれの反復表現の機能のあらわれ方がどのように異なるかについて見てみたい。

2. 先行研究

談話⁽¹⁾における反復表現を扱ったものとしてはTannen(1989)、中田(1992)などが挙げられる。これらは、従来、情報伝達における冗長さのあらわれであるとして分析の対象から外される傾向にあった反復表現を、談話の流れの一部の機能を担うものとして扱っている点で注目される。この二つの論文は本研究のきっかけとなったものであり、ここで簡単に見ておきたい。

Tannen(1989)は、反復表現が広範囲にわたって日常言語に入り込んでいることを例証することを第一の目的として、アメリカ人の友人同士のくつろいだ英語の会話を分析している。そして、「反復表現の機能」(Functions of repetition of conversation)を以下のように大きく四つのカテゴリーに分類している(pp. 48-51, 筆者訳, 以下も同じ)。

- (1)産出 (production) の観点から — 反復表現は、話し手が言語をより能率的または容易に用いることを可能にする。
- (2)理解 (comprehention) の観点から — 反復表現は冗長性を高めるが、それによって聞き手の理解を促進させる。
- (3)結合(connection)の観点から — Halliday and Hassan の cohesion に相当するものであり、先行する発話との関連づけを行う。
- (4)相互やりとり(interaction) の観点から — 相手の発話を反復することによって会話を進行させていく。

そしてさらに、その具体的な「機能例」(Examples of functions of repetition)として以下の九種を挙げている。

〔反復表現の機能例〕

- ①聞き手の共感・一体感
- ②確認
- ③ユーモア
- ④ことばのとりたて
- ⑤時間かせぎ
- ⑥話の展開
- ⑦会話への参加
- ⑧ことばのリズム
- ⑨エピソードの境界性(Bounding episodes)

なお、Tannenは以下の範囲を反復表現の分析の対象として定めている。

「反復表現の形式」：①自分が発話した要素の反復(self-repetition)
②相手が発話した要素の反復(allo-repetition)

「反復表現の対象」：意味の尺度で捉え同一語句及び関連語句までを対象とする。

しかし、Tannenの研究は談話における反復表現をできるだけ広範囲に捨てる目的でなされたものであり、上記九種の機能例も特に「分類カテゴリー」は設けていない。また、「反復のサイズ」に関しても規定せず、十分な分類の枠組みは示されていない。

中田(1992)は、対象言語を日本語に置き換えて、Tannenの提示した反復表現の機能を、R.ヤコブソン(1960)の六機能(関說的機能, 心情的機能, 動能的機能, 交話的機能, 詩的機能, メタ言語的機能)の観点から分類し、それに中田独自の「談話構成的機能」を加えた七機能を立てて、表1のような分類カテゴリーを設けている。

表1. 中田の機能分類 (中田 1992:292)

機能の種類 (下線部はTannen(1989)の指摘によるものを示す)	
1. 関說的	<u>反復・連続的なことの描写</u> , 受信応答, 問い返し, 強調・念押し, 理解の徹底
2. 心情的	感情の表出, <u>話の内容に対する姿勢表出</u> , <u>相手に対する姿勢表出</u> , <u>相手との共感・一体感表出</u>
3. 動能的	働きかけの強め, <u>反復を特徴とする行為遂行</u> , <u>反論などの方策</u>
4. 交話的	コンタクトの修正・再開, <u>コンタクトの保持</u> , <u>会話への参加・寄与</u> , <u>時間かせぎ・間つなぎ</u>
5. 詩的	<u>ことばのリズム・テンポ</u> , <u>ことば遊び</u>
6. メタ言語的	ことばの意味の確認, <u>ことばのとりたて</u>
7. 談話構成的	<u>結末の表示</u> , 発言・話題の修正, 話題の呼び戻し, 話の筋の修正

しかし、このカテゴリー分類にはやや難点があるように思われる。言うまでもなくヤコブソンの研究の目的は、詩的言語の分析に先立って人間のコミュニケーション理論の一般モデルを作るという点にあり、ヤコブソンの六つの機能(関說的機能, 心情的機能, 動能的機能, 交話的機能, 詩的機能, メタ言語的機能)は、言語的コミュニケーションを成立させる六つの要因(コンテキスト, 送り手, 受け手, コンタクト, メッセージ, コード)にそれぞれ割り振られた一般モデルである。従って、ヤコブソンの六機能はコミュニ

ケーションの静的モデルとして提唱されたものであり完成度の高いものである。しかし中田は、この静的モデルに「談話構成機能」という談話のプロセス（時間の流れ）に関する動的な機能を追加しており、七つの機能の全体的な整合性がとれなくなっている。すなわち「談話構成機能」と他の六つの機能を並べて議論することは困難であるように思われる。

こうした理由から中田の分類には多少の疑問は残るものの、Tannenが英語の会話において観察した反復表現の大半の機能が日本語の会話においても観察されたという報告（1991:293）は大変味深い。談話には文章や独話とは異なる大きな特徴がある。それは、伝達が双方向的であり複数の参加者の相互作用によってコミュニケーションの文脈が動的に作られていくという特徴である。従って、談話に現れる反復表現には文章には見られない談話特有の働きがあることが予想され、Tannenや中田で報告された機能はこの点を裏づけるものである。しかし二人の研究は共に反復表現の機能や表現効果の分析に留まっており、複数の談話を比較し各談話間に見られる特徴を記述するまでには至っていない。Tannenや中田が指摘するように反復表現が談話の構造化に大きな関わりを持つ要素だとすると、一つひとつ構造の異なる談話においてそのあらわれ方は異なるはずである。

本稿ではこの点に注目し、複数の談話資料を用いて談話全体の中での反復表現のあらわれ方とその役割を探ることにする。

3. 分析の対象と方法

3.1. 分析資料について

本稿では六つの談話資料（稿末参照）を用いる。資料は佐久間監修による『談話資料集』（1991年度版）から四資料を用い、新たに二資料を収録し追加した。「発話の単位」⁽²⁾を含む文字化の方法は佐久間(1991)に従った。

以上の六つの資料から収集した1483例の反復表現（総発話数7813発話の18.98%に当たる）を分析の対象とした。資料の選択に当たっては、人間関係という変数を考慮に入れて選択したが、詳しくは4.1の「談話資料の概要」のところで述べる。

3.2. 分析の方法

3.2.1. 対象とする反復

本稿で考察する反復表現の範囲は、Tannen(1989)に倣って(1)自分が発話し

た要素の反復（以下自己反復）と(2)相手が発話した要素の反復（以下他者反復）の双方を扱うこととし、反復表現の起こる位置についても、(3)元の発話にすぐ続く反復（以下直前反復）と(4)元の発話と反復との間に他の発話が挟まれる反復（以下非直前反復）を対象とした。なお、「関連語句群」をどこまで分析の対象とするかについてはTannenと同様に意味の尺度で捉え、「類義語」の範囲までとした。「指示表現」は反復の対象とし「省略」は今回は扱わないことにする。また「言う」「ある」「いる」などのようなどのような文脈においても頻出し文脈の特徴的な語句とはなりえないようないわゆる「無性格語」は対象から外した。

3.2.2. 反復のサイズ

反復のサイズについてであるが、「文章論」においては反復を語句のレベルで捉えており原則として「一単語を越えない単位」であると思われる。一方「談話」においては、中田は反復のサイズを決めないで「くり返される要素は語、句などさまざまな要素のものを含んでいる」（1992:271）とし、またTannen（1989）も反復のサイズを決定するのは難しいと断った上で、最小では例えば‘in terms of time’における‘terms’や‘time’の‘t’音を反復のサイズとし、大きいレベルではセンテンス全体を反復のサイズとして認めている。以上のように、談話資料の反復のサイズの決め手はまだないように思われる。そこで本稿では次のような二種類の反復のサイズを設けることにする。

①「発話の単位」と同じサイズのもの。

例：213SA: なんて言うの？
214SA: のっ、乗っちゃって、
215SA: なんて言うの？（資料1）

②発話内で意味のまとまりをもつ分節可能なサイズのもの。

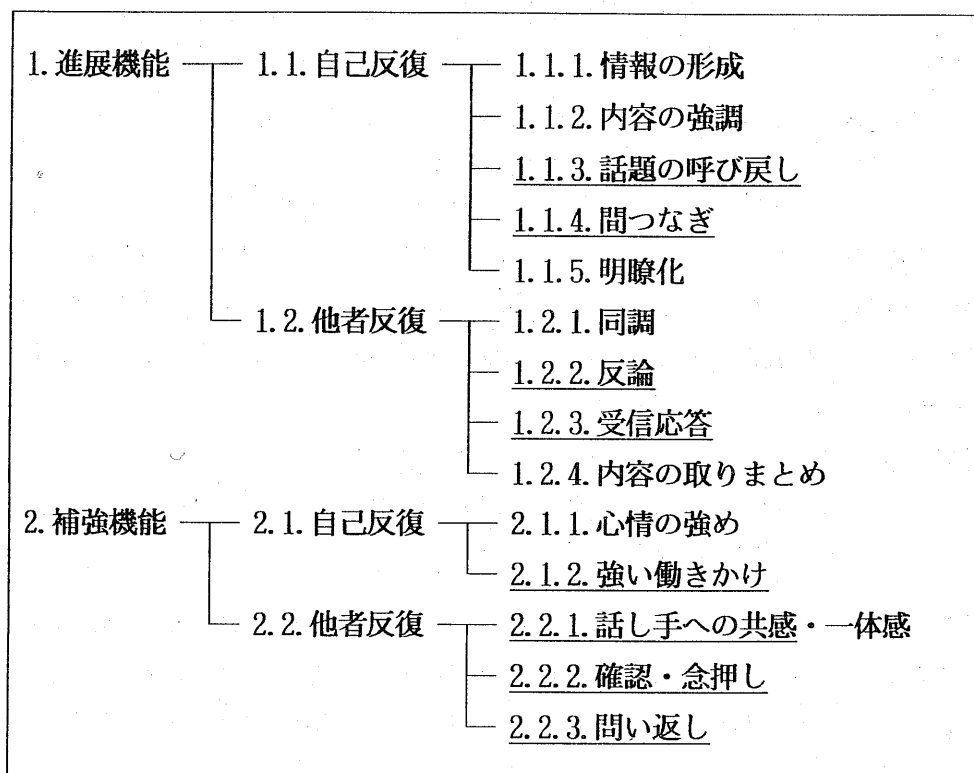
例：125EY: 卒業式もでないかと思っていたのかなー、先生。
126EY: ねー、卒業式なんて別にでなくてもいいと思わない？

ここで「意味のまとまり」を一単位としたのは以下の理由による。話し言葉で何か言おうとする場合、文章のように長い語句を隔てて照応しあうような構成の仕方はとらない。思いつくまま情報を追加して話を進めていく。その際、生理的制約から息継ぎをしなければならぬが、息継ぎはでたらしに行われるわけではなく情報の組み立てと理解の妨げにならないように行われるはずである。即ち、話し手は意味のまとまりをひとつのサイズとして情報を繋いでいく。本稿では以下に示すように、反復表現の機能カテゴリー設定において「情報量の変化」が重要なマーカーとなるため「意味のまとまり」を最小単位とすることは有効であると考えられる。

3.2.3. 反復表現の機能分類

本研究では談話資料から採集された反復表現の機能を分類するにあたり、「情報量の変化」⁽³⁾ という観点から以下のような二種十四類の機能分類を試みた。反復表現がきっかけとなって情報量を増やしコミュニケーションの流れを先へと進める機能を「進展機能」、情報量そのものは変わらないが反復表現がコミュニケーションの流れを支える役割を果たす機能を「補強機能」とした。さらに、それぞれをTannenに従って「自己反復」によるものと「他者反復」によるものに分け、Tannenや中田によって指摘された項目はそれぞれの下位項目に再分類を試みた。詳細は以下の通りである。

表2. 反復表現の談話機能の分類（下線部はTannen, 中田の指摘によるもの）



本稿で「進展機能」・「補強機能」とした主な例について述べておく。

【進展機能】

- [例1] : 13MA: 「ジェラード」ってあるじゃん。
 14SA: アイスクリーム屋さん？
 15MA: う//ん。(// は同時発話を表示)
 16SA: あー、あー。
 17MA: あそこへ行ってね、

18MA: 食べようと思ったら、 (資料1)

この例は、13MAの発話を17MA「あそこへ行ってね」に持ち込んで、さらに18MA「食べようと思ったら」と新しく情報を追加して、話を先へと進めている。すなわち、話の流れを進める際、話の流れの中にある言語断片「ジェラード」に焦点を当て言語断片を反復して話を展開させている例であり、「進展機能」の「1.1.1. 情報の形成」として分類される。

[例2]: 284SA: 大河原でもいいんじゃない?
285MA: あそこって、泊まるそこあったっけ? (資料2)

例2は、285MAが284SAの発話「大河原でもいいんじゃない?」を他者反復し、284SAの発話の話題にのって話を先へと進めている。このような機能を「1.2.1 同調」とする。文脈形成機能の点では「1.1.1 情報の形成」と同じであるが、「1.1.1 情報の形成」は自己反復であるのに対して「1.2.1 同調」は他者反復であるため、両者を区別することにする。

[例3]: 37EY: 大学に行った人とか多いの?
38YY: ほとんど行く、うちの学校。 (資料2)

この例は、37EY「大学に行った人とか多いの?」という問いかけに対して38YYで「ほとんど行く」と答えている。問いかけに対する答えは新しい情報であるため「進展機能」とし、このような反復例を「1.2.3 受信応答」として分類する。

【補強機能】

[例4]: 52YY: もう一年来てくださいって。
53EY: そうだよ、きっと。
54EY: そうだよ。 (資料2)

54EY「そうだよ」は、53EY「そうだよ」を反復しているが、この例は話を先へと進めているわけではない。自分の気持ちを一度では言い足りなくて繰り返している例であり、「補強機能」の「2.1.1. 心情の強め」として分類される。他の例では、「コーヒー飲む?」と聞かれて「飲む! 飲む!」と繰り返すのも同じ反復例である。

[例5]: 96MA: 一緒にしゃべろうよ。
97IK: 一緒にしゃべろうよ。 (資料3)

これは、96MA「一緒にしゃべろうよ」を97IKがそのまま反復している例である。この反復には実質的な意味はないが相手と同じ言葉を繰り返すことによって、お互いの共感や連帯感を強めあう役割を果たしている。このような反復表現は「2.2.1 共感・一体感」として分類される。

4. 分析の結果と考察

4.1. 談話資料の概要

本研究では談話資料として、以下の三種類を用いた。これら三種類の資料は人間関係というやや漠然とした変数を考慮に入れて選択したものだが、その特徴を示すと概略次のようになる。

《姉妹の談話》（以下、「姉妹」）

全く気のおけない関係でリラックスした雰囲気の中で談話が進行する。また談話の背景となる多くの経験を共有している。

《友人同士の談話》（以下、「友人」）

親しい関係ではあるが互いに相手に対する配慮を行いつつ、人間関係を維持していく。また姉妹ほどではないが、大学の仲間ということからある特定の領域においては話題の共有が想定される。

《『徹子の部屋』》（以下、「徹子」）

TV番組という性質上、ある限られた時間内に予め決められた内容を要領よくゲストに話してもらうという制約があり、上の二つのような台本のない気楽な談話とは性質を異にする。また視聴者の目を意識している。人間関係の親疎については、確かなことは分からないが上の二つの対話者の関係と比べるとやや心理的距離があるものと考えられる。なお、番組の選択に当たっては他の資料と合わせるため、ゲストの年齢を考慮して選択した。

本研究では、これらの三種類をそれぞれ二資料ずつ、計六つの談話資料を分析対象とし、上述した二種十四類の機能カテゴリーに従って分析した。なお、各カテゴリーとも反復表現の現れる位置（直前反復・非直前反復）についても分析の対象としているが本稿では紙幅の関係上、各資料における「進展機能」と「補強機能」に関する分析・考察についてのみ報告する。

4.2. 分析結果と考察

(1)各資料カテゴリーにおける「進展機能」と「補強機能」の比較
表3.

	進展機能	補強機能
姉妹	80.95%	19.06%
友人	71.22%	28.79%
『徹子』	87.13%	12.87%

($\chi^2(2)=7.97, p.<.05$)

表4. 表3 の調整された残差

	進展機能	補強機能
姉妹	0.36	-0.36
友人	-2.61**	2.61**
『徹子』	2.24*	-2.24*

表3は各資料カテゴリーにおける「進展機能」と「補強機能」の割合を見たものである。各資料とも「進展機能」の割合が高く、反復表現の機能の大半は話の流れを先へと進める「進展機能」であることが分かる。ここで注目すべきは、「友人」の談話において「進展機能」の割合がやや低く「補強機能」の割合がやや高い点（統計的に有意）である。この点については以下で詳しく考察する。

(2)各資料カテゴリーにおける自己反復率と他者反復率の比較

表5.

	進展機能		補強機能	
姉妹	(全体 80.95%)		(全体 19.06%)	
	自己反復率 60.88%	他者反復率 39.08%	自己反復率 16.91%	他者反復率 83.05%
友人	(全体 71.22%)		(全体 28.79%)	
	自己反復率 57.03%	他者反復率 42.98%	自己反復率 14.48%	他者反復率 85.50%
『徹子』	(全体 87.13%)		(全体 12.86%)	
	自己反復率 63.17%	他者反復率 36.84%	自己反復率 7.70%	他者反復率 92.34%

表5は、表3で見た三つの資料カテゴリーにおける「進展機能」及び「補強機能」の割合を、それぞれ「自己反復率」「他者反復率」に分けて示したものである。「進展機能」においては「自己反復率」がやや高く、「補強機能」においては「他者反復率」が圧倒的に高い。「進展機能」は反復しながら話を先へと進める機能である。「進展機能」は「自己反復」しながら話を進める場合がやや優勢であるものの、「他者反復」も約6対4の割合で認められる。これは書き言葉には見られない談話特有の現象である。また「補強機能」についても、話の流れを支える役割を担うという談話特有の性質上、

大半が「他者反復」であるという点に注目したい。

「進展機能」において「他者反復率」がもっとも高いのは「友人」(42.98%)である。本稿においてこの点は大変重要なポイントとなる。つまり、書かれた文章であれば「進展機能」はすべて自己反復のみによって行われ他者反復は出現しない(会話文は除く)。「進展機能」における他者反復の出現は相手との共同によって話を展開させていることを意味し、この意味において話し手と聞き手の心理的なラポールを作り出す役割を担う「補強機能」と共通性を持つと考えられる。即ち、両者はいずれも「コミュニケーションの共同性」に深く関わる機能である。そしてこの二つの反復率が高いということは、その談話は他者(相手)との共同性が高い談話であり、これは「友人」の談話の一つの特徴であると言えよう。

では、なぜ「友人」の談話は「コミュニケーションの共同性」が高いのだろうか。「姉妹」や『徹子』の談話とどう違うのだろうか。上の「談話資料の概要」のところで述べたように、「姉妹」は全く気を使わない親しい関係にある。従って、聞き手は話し手に積極的に関わって人間関係を維持しなければならないという気遣いはない。このことは長年連れ添った夫婦の会話を考えてみればよく分かる。話し手の発話に対して簡単な相づちや生返事だけを返していても普通は許される間柄である。実際「姉妹」の資料には反復表現の代わりに短い相づちや「うん」だけの応答詞が頻繁に観察された。それに対して「友人」は、お互いにある程度は相手に対する配慮が必要な間柄である。「友人」の談話では、以下の例のように文脈上は「うん」などの応答詞だけでも可能な文脈において他者反復が多く観察された。

1.2.3(受信応答)の例:

[例6] 628MA: 「無いように見える?」
629IK: 「無いように見える。」 (「友人」資料4)

[例7] 117IK: 「(録画のスイッチが)今、入ってるの?」
118MA: 「入ってる、入ってる。」 (「友人」資料3)

また、補強機能の「2.2.1 共感・一体感」を示す反復表現は140例観察されたが、その中102例が「友人」の談話から採集されたものである。

このように「友人」の談話には「他者反復」が多く出現するが、これは反復表現が、「うん」や「はい」などの応答詞や相づちよりももっと積極的な会話への参加のマーカであると考えると、配慮の必要な関係において頻出するのはうなづける結果である。

一方、『徹子』は人間関係からいえば「友人」以上に相手に対する配慮の必要な間柄であるが、TV番組という性質上予め話す内容は決まっている。また時間的制約もあり話題をどんどん進展させていく必要がある。反面「補強機能」に含まれる「2.1.1 心情の強め」「2.1.2 内容の強調」といった主観的な側面はメディアという点を考慮すれば少なくなることが想定できる。従って、三資料の中で「進展機能」の割合がもっとも高く、「補強機能」がもっと低くなっているのはこうした事情によるものと推測される。

5. まとめと教育的示唆

本稿では反復表現を取り上げ、人間関係の親疎を変数として選択された資料カテゴリ間での反復表現のあらわれ方を対話機能の観点から観察した。その結果、日常談話に出現する反復表現は話し手と聞き手双方の積極的なかわり合いを示す重要なマーカーであり、談話構成上重要な役割を担うことが観察された。

では反復表現を「コミュニケーションの共同性」という視点で捉えた時、外国語教育にどのような示唆を与えうるであろうか。第一に、学習者は単語量が少なくても相手の発話を反復することで談話に積極的に参加することができる。第二に、相手との人間関係を維持する有効なストラテジーの一つとして反復表現を用いることができる。そして第三として、従来の厳しい文法観の束縛から抜け出すことが可能になるのではないだろうか。即ち、最初から完全な文を話すことが前提となる教授法ではどうしても文法の束縛から逃れることはできない(田中, 1997)。しかし今回の談話資料で見たように、実際の会話は始めから完全な文を話すわけではなく心情が高まって何度も同じことを繰り返したり、一度で言いたいことが言えなくてももう一度言いなおしたりしながら情報を繋いでいく。また私たちは対話をする際、常に「文」を一つのサイズとして話しているわけではなく、文よりも小さい単位で自己反復や他者反復をしながら対話を進めている。これが会話の実態である。こうした点を考慮するならば、コミュニケーション能力の養成を目的とする際反復表現を教材に取り込むことは有効な手段であるように思われる。

反復表現の出現する位置の違いの観点からの分析・考察については本稿では言及できなかった。また、「補強機能」と「相づち」は部分的に重なり合う面があることが示唆されたが、今回はこの点について踏み込むことができなかった。今後の課題としたい。

- 注: (1) 「談話」という用語は話し言葉と書き言葉を含めた意味で用いられることもあるが、本稿では音声言語の意味で用いる。
- (2) 「発話の単位」に関しては多くの案(泉子・メイナード1993のPPU、中田 1990 のMOVE、杉戸、ザトラウスキーなど)が提示されている。杉戸(1987:p. 83)は「話者のひとまとまりの音声言語連続(笑い声や短いあいづちも含む)で聞き手の音声言語連続やポーズによって区切られる単位」を一単位とし、またザトラウスキー(1993)は大筋で杉戸に従いつつ「接続助詞で示された従属節がある参加者の発話中に二つ以上連続する場合は異なる発話単位として区別する(p. 88)」としている。本稿での「発話の単位」は佐久間に従うものであるが、それはザトラウスキーに重なるものである
- (3) 本稿では自分または相手の発話を反復して話の内容を展開させる場合反復をきっかけとして「情報量が増えた(変化した)」と考える。
- A: この店のおうどん、おいしいね!
- B: おいしいうどん食ると元気が出るね。
- 一方、次のような例では、BはAの発話に共感を示しているのみで、「情報量には変化がない」と考える。
- A: この店のおうどん、おいしいね!
- B: おいしいね!

〔主な参考文献〕

- 畠弘巳(1982)「コミュニケーションのための日本語教育」『言語』11-13
- 佐久間まゆみ監修(1991)『談話資料集』日本女子大学
- 杉戸清樹(1987)「発話のうけつき」『談話行動の諸相析』三省堂
- 泉・メイナード(1993)『会話分析』くろしお出版
- 田中茂範(1997)「断片連鎖と日常会話チャンキング」『コミュニケーションとしての英語教育論』(鈴木祐治他)アルク
- 中田智子(1990)「発話の特徴記述について—単位としてのmoveと分析の観点」『日本語学』9-11
- (1992)「会話の方策としてのくり返し」(国立国語研究所報告104『研究報告集13』秀英出版
- ポリリー・ザトラウスキー(1993)『日本語の構造分析』くろしお出版
- ヤコブソン(1973)『一般言語学』(川本茂雄 邦訳) みすず書房
- Tannen, Deborah. (1989) *Talking voices: Reretition, dialogue, and imagery in conversational discourse.* CUP.

<分析資料>

資料番号	談話の種類	時間	対話者
資料 1	姉妹の雑談 (1対1) 発話総数 760発話	25分	SA: 22歳 女子大 4年 MA: 18歳 高校 3年
資料 2	姉妹の雑談 (1対1) 発話総数 541発話	20分	BY: 22歳 女子大 4年 YY: 21歳 短大 2年
資料 3	女子大生の雑談 (1対1) 発話総数 1748発話	30分	MA: 22歳 女子大 4年 IK: 22歳 女子大 4年
資料 4	女子大生の雑談 (1対1) 発話総数 2332発話	40分	SH: 22歳 女子大 4年 OH: 22歳 女子大 4年
資料 5	TV番組『徹子の部屋』対談 発話総数 1246発話	40分	KT: 黒柳徹子 司会者 MR: 牧瀬里穂 ゲスト
資料 6	TV番組『徹子の部屋』対談 発話総数 1187発話	40分	KT: 黒柳徹子 司会者 OK: 岡本健一 ゲスト

(お茶の水女子大学大学院博士課程前期言語文化専攻)